

海外でのハプニング

豊澤 幸平

旅には未知なる驚きや出会いも多く、心がウキウキする。しかし未知なるゆえ、非日常ゆえにハプニングに遭遇、とりわけ海外旅行や海外での仕事ではドキッとすることがある。

一九八〇年代、出張でロンドンからパンナム〇〇一便（当時、世界一周便で有名）に搭乗しニューヨークに向かったが、突然大西洋上でとある島に不時着した。初めての欧米出張、また当時は英語のヒアリング能力が不十分で、パイロットの説明が理解できずパニックに陥った。困り果て隣の白人の男性に「何が起こっているのかを紙に書いて下さい」と頼んだところ、「エンジントラブルで不時着、現在は修理中」とメモをしてくれたのでやっと安堵した。

一九八九年、ドイツ駐在直後、二ヶ月ほどバイエルン地方のプリーンという風光明媚な街にいた。週末にミュンヘンの美術館に行き、帰りの電車で車窓の風景を楽しんでいた。約一時間で到着するが、ふと窓の外の風景を見たら以前と違う風景、そのうちに電車は終着駅に到着した。駅名はクフスタイン、なんとオーストリア側の駅であった。プリーンに行くには途中で乗り換えが必要であった。当時はEU内でも越境の時はパスポート提示が必要であったが、その日は国内移動ということで携帯していなかった。まずいと思ったが入国審査員に事情を説明、大目にみてくれ事なきを得て、折り返しの電車に乗った。乗り換えの *umsteigen* というドイツ語は今も忘れない。

二〇一九年、ダラス行きの日航に乗る為に早朝に成田空港に急いだ。カウンターで *check-in* しようとする時、「お客様、この便は羽田発ですね」「えー」。すっかり成田発と思い込んでいた。さてどうするか、ここはお金を惜しまずタクシーを飛ばすしかない、と咄嗟に判断。成田に早く到着していたこと、休日の午前中で道路もすいていたので無事に羽田で *check-in*、難を逃れた。

今秋、南イタリアに行くが、十分気をつけること、何か起こっても二次トラブルが起こらないようにしたい。

(二〇二四年八月)